御伽草子本の成立と寛文期

藤掛和美

一　はじめに

渋川版御伽草子本の成立に関しては、三つの時期が問題になってくる。第一が、渋川版へと行き着いた、いわゆる広義の御伽草子群が成立した室町時代であり、第二が、渋川版御伽草子本の祖本というべき丹緑横本の成立時期であり、第三が、「御伽草子（御伽文庫）」と名付けられて、本屋渋川によって刊行された時期である。第一の時期は、渋川版の中に若干似た本文を持つ作品があるとは言え、主に話源において問題になる時期であり、第三の時期は御伽草子という名を持ったとは言え、覆刻された時期であって、御伽草子本の成立という時には、厳密には、第二の時期が最も問題になろう。

本稿は、この第三の時期、即ち、渋川版と同版の丹緑横本の成立時期について私見を述べ、更に、その丹緑本の成立した時代背景について言及しようとするものである。

二　これまでの諸説

現在、渋川版御伽草子二十三編の中、同版の丹緑本（縦五寸三分～四分、横七寸七分～九分の横本）は、次の七編の存在が確認されている。(注一)

「ふんしやう」（日本民芸館蔵・岩瀬文庫蔵　中欠）
「小町草子」（早大蔵　巻首欠）
「いつみしきふ」（吉田小五郎氏蔵）
「七くさ」（岩瀬文庫蔵　有欠）
「さゝれ石」（日本民芸館蔵）
「しまわたり」（吉田小五郎氏蔵　上欠）
「酒天童子」（日本民芸館蔵）

現存の確認は七編であるけれども、その他の十六編も、恐らく出版されていたろうと考えられている。

これら丹緑横本の成立時期について、これまでの主たる諸説を復習しておこう。

○横山重氏は『室町時代物語集　第二』所収「梵天国」の解題において、

これ等の丹緑横本を、笹野堅氏は、寛文頃の刊行と推定されてゐる。しかし、自分等は、絵柄や板式から見て、もう少し古いのではないかと思ふ。正保・慶安でないとすれば、承応・明暦と云つてもいゝやうな、板式と画風とを、此等の丹緑横本は持つてゐる。

と述べられ、又、同集第五の「ふんしやう」（横山重氏蔵　丹緑横本）の解題では、

本書は稀に見る美しい本である。陰山金四郎氏の蔵本も美しい本であつた。岩瀬文庫には、上と下の二冊（中欠）本があつた（上巻十一丁欠）が、その本も比較的に美しい本であつた。又、柳宗悦先生にも零本があつた。柳先生は、此本の丹緑の色をよしと云はれた。その筆彩色は、丹緑紫黄色の絵具の他に、胡粉や、いぶし銀などを、稀に塗り用ゐてある。

本書は、いはゆる御伽草子本の祖本であつて、寛永頃の刊行と思ふ。字体や絵柄も寛永頃に見える。

と述べられる。即ち、「ふんしやう」の項では、寛永頃（一六二四～四三）とされ、「梵天国」の項で、他本の丹緑本に触れられた際には、正保・慶安～承安・明暦（一六四四～五七）とされる。

○川瀬一馬氏は『江戸時代仮名絵入文学書概論』において、

また、お伽草子の版本として、二十三部繙つた横本仕立の絵入本の揃いがあつて、これは文字の書風も装幀もともに奈良絵本風のものを模刻した形を具えている。初印のものには所謂「間似合紙」（鳥の子紙のまにあいという意）に刷つてあるものがある。ここにも普通の楮紙に刷つた「はちかづき」と「御ざうし島わたり」の二部を所収したが、二本ともに初印と認められる。刊記がないので、刊行年時を明確にし難く、ことに模刻であるので出版年代を推定しにくくさせているが、恐らく寛永以後、間もない頃であろう。

と述べられ、横山重氏とほぼ同時代で、寛永以後間もない頃を推定される。

○「伝本から見た御伽草子二十三編について」(注一)において、渋川版御伽草子の詳しい伝本研究をされた松本隆信氏は同論文の中で、

この丹緑横本は、江戸時代前期の物語草子類の版本とは、全く版式を異にするので、その刊行年代を厳密に推定することが難しく、寛永頃とも寛文頃とも言われるが、丹緑本に造詣の深い吉田小五郎氏は、明暦・万

治の頃ではないかとされている。（中略）以下本稿では、はじめに丹緑横本として出され、後に渋川清右衛門によって再刊されたこの叢書を、御伽草子本の名で呼び、最初の刊行年時を明暦・万治を下らぬ頃とする前提に立つこととする。

と述べられ、吉田小五郎氏とほぼ同時期の、明暦・万治（一六五五～六〇）以前を想定される。

丹緑横本の説明部も含めたため引用が長くなったが、これら今までの主だった諸賢の考えを整理すると、上限の寛永（一六二四）から下限の寛文（一六七三）に至る凡そ五十年間が考えられていて、時代を追って、〈寛永〉―川瀬、〈寛永～明暦〉―横山、〈明暦・万治〉―吉田、松本、そして〈寛文〉―笹野、というようにまとめられる。

以下に、丹緑横本の成立期について私見を述べることとする。

三　丹緑横本（御伽草子祖本）の成立期

江戸時代に入り、印刷技術の発達から出版物が増加した。殊に寛永以降の増加は目を見張らせるものがあった。写本、奈良絵本という手書き冊子が、印刷されて、「物の本」＝「本」＝「書物」として「商品」となり、売られ読まれるようになったのである。書肆（本屋、書店）が増え、出版点数も増加するにつれて、出版目録が必要となり、書籍目録が出されるようになった。それらの主要なものが、『江戸時代書林出版書籍目録集成』（斯道文庫編・井上書房刊）に翻刻出版されて、近世初期文芸研究の極めて貴重な基礎資料となっている。

同書（全三巻）には、寛文ごろ無刊記『和漢書籍目録』以下、明和九年、京都武村新兵衛刊『大増書籍目録』に至るまで、十四種に及ぶ『書籍目録』が収録されている。それ以前のものとして、東寺観智院蔵万治二年写本『新板書籍目録』があるけれども、ここには収録されず、最初に収められた寛文無刊記本にその所収本が注記されている。従って、以上の十五種について、渋川版御伽草子二十三編の作品名の記載を調査してみると別表のようになる。

表(1)　『江戸時代書林出版書籍目録集成』所収御伽草子作品

	文正さうし	鉢かづき	小町草紙	御曹子島渡	唐糸さうし	木幡狐	七草草紙	猿源氏草紙	物くさ太郎	さゞれいし	蛤の草紙	小敦盛	二十四孝	梵天国	のせ猿さうし	猫のさうし	浜出草紙	和泉式部	一寸法師	さいき	浦島太郎	横笛草紙	酒呑童子
(万治二年写本) 1659 1	○										○		○	○			○						○
寛文無刊記本 (六年頃) 2	○	○	○		○			○	○		○	○	○	○			○				○	○	○
寛文十年刊本 1670 3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
〃十一年刊本 1671 4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
延宝三年刊本 1675 5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
貞享二年刊本 1685 6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
元禄五年刊本 1692 7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
〃十二年刊本 1699 8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
延宝三年刊 1675 9	○	○	○		○	○	○				○	○	○	○			○		○		○	○	○
天和元年刊 1681 10	○	○	○			○	○				○	○	○	○			○		△		○	○	○
元禄九年 元禄九年 1696 11	○ ○	○ ○	○ ○			○					○ ○	○ ○	○ ○				○ ○		○ ○		○ ○	○ ○	○ ○
〃 1696 (正徳五年1715修) 12	○		○			○					○	○	○				○		○		○	○	○
享保十四年 1729 13																							
宝暦四年 1754 14																							
明和九年 1772 15																							

御伽草子作品は、「薄雪物語」「恨之介」等仮名草子や、「大織冠」「満仲」等舞の本とともに、「舞並草紙」の項に記載されている。これらの渋川版御伽草子名が全て、御伽草子祖本の丹緑本と同一作品かどうかはわからないが、とにかく、寛文十年刊『増補書籍目録作者付大意』（京都西村又左衛門・江戸西村又右衛門刊）に、二十三編全ての作品名が載り、以後元禄十二年刊本まで続く。延宝三年刊以降のものは、江戸にて開板され、「伊呂波わけ」に形式が変更された新形式の書籍目録で、記載作品にも再検討があったためか、「御曹子島渡」等の七・八編が記載されていない。そして、享保十四年本以後のものは、享保七年のいわゆる「寅年のお布令」といわれた出版統制以後の目録のため、新たな部類わけがなされ、記載作品名にも大巾な変更があって、御伽草子作品群は「薄雪物語」「恨之介」等とともに記載されていない。

ここでは、初期の三種の「書籍目録」を問題にし、比較検討してみる。

○万治二年写本に記載される作品名

はまいで　ふんしやう　酒天童子　梵天こく　はまくり草紙　廿四孝　の六編（注三）

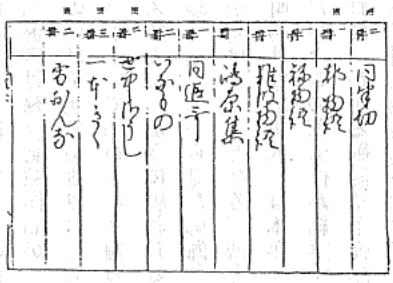
○寛文無刊記本（寛文六年頃刊）に加わった作品名

からいと　はちかづき　物くさ太郎　浦島太郎　子あつもり　よこふえ　猿源氏　小町草紙　の八編で計十四編が載る。

○寛文十年刊本に加わった作品名

こはたきつね　ねこのさうし　いづみしきぶ　七草さいき　のせさる　さゝれ石　しまわたり　一寸法師の九編で、計二十三編全てが載る。

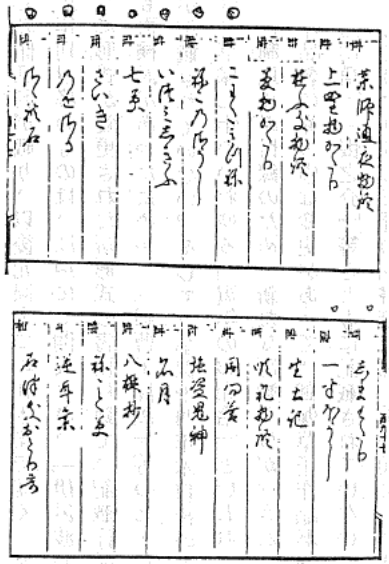
問題は、寛文十年刊本への加わり方である。万治二年写本及び寛文無刊記本においては、各作品は、その他多くの作品の中に散在して記載される。しかし寛文十年刊本に加わった九編は、寛文無刊記本の「舞並草紙」の最後に新たに加わった作品群の中に一括して記載される。今判り易く表(2)にて、寛文無刊記本の「舞並草紙」の項の最終丁を示す。「雪おんな」で終っている。



表(2)

そして、寛文十年刊本になると、そこへ「うき京物語」以下「まりの書」まで、六丁にわたり、五十九編の作品名が加わっている。新たに加わった二、三丁目に表(3)に示すごとく、「こわたきつね」以下「一寸ほうし」まで、九編の御伽草子作品名が列挙される。

表(3)



当時、各書肆からさまざまな形の刊本が出版されていた。例えば「文正草子」についてみると、室町末の写本から始めて、絵巻、奈良絵本を受けて、「寛永」刊絵入大本、承応二年刊絵入大本・寛文四年長尾平兵衛刊絵入大本、寛文十一年松会刊絵入大本、明暦四年刊絵入大本

そして、本稿で問題にする丹緑絵入横本、渋川版御伽草子本等、各種の写本や刊本があった。従って、その他の御伽草子作品も含めて、各「書籍目録」記載作品が、厳密にどの版本のことを言うのかは不明であるけれども、寛文十年刊「書籍目録」に、まとめて加わった九編の作品は、同じ版式のものと考えてもよいように思われる。

ここで、松本隆信博士の論文「伝本から見た御伽草子二十三編について」の援用を受けることとなる。博士の横山重氏と共編になる『室町時代物語集成』は本年（昭和六十年）一応の完結を見たが、この御労作が結実するに至るまでに、博士がなされた、かかる御伽草子作品群についての伝本研究は御伽草子研究進展に多大な影響を及ぼした。(注四)

博士は御伽草子二十三編について詳細な伝本研究を行い、以下のように整理された。

(A)　慶長期以前の古写本の伝存する作品

文正草子・鉢かづき・蛤の草紙・小敦盛・浜出草紙・浦島太郎・横笛草紙・酒呑童子

(B)　古写本は伝存しないが、江戸時代の伝本に、本文に異同の甚しい異本のある作品

御曹子島渡・唐糸草子・七草草紙・さゞれいし・梵天国

（C）　御伽草子本の外に、江戸時代の版本や写本が伝存するが、本文の系統としては単一である作品

小町草紙・猿源氏草紙・物くさ太郎・二十四孝・和泉式部

（D）　伝本としては御伽草子本一種と言ってよい作品

木幡狐・のせ猿草子・猫の草子・一寸法師・さいき

博士の主張は、これらの伝本研究によって室町期物語と思われて使用されがちな、普及本渋川版御伽草子の詞章が、実は比較的新しく、多くが江戸時代に入って書かれたものであって、それ故に室町時代物語のテキストとして扱うことへの慎重さを要求されたものであった。

博士は、先に既に見たように、これら御伽草子祖本の成立を明暦・万治以前に想定されているが、博士のかかる伝本研究と、寛文十年刊「書籍目録」に一括加えられた作品群とをクロスさせる時、極めて興味深い発見がある。

即ち、（D）群の御伽草子本一種しか伝本を持たぬ、「木幡狐」「のせ猿草子」「猫の草子」「一寸法師」「さいき」は、いずれも、寛文十年刊「書籍目録」に新たに加わった作品である。更に又、その他の「和泉式部」「七草」「さゞれいし」「御曹子島渡」は、（B）・（C）に整理されて他に異本を持つとは言え、版本としては、いずれも御伽草子本一本しか存在していないのである。

従って、寛文十年刊「書籍目録」に新たに加わった作品は、御伽草子祖本の丹緑横本であることに相違ないと思われる。

それ以前の書籍目録に一旦作品名が載った場合、他の異本が出版されても、改めてつけ加えていないから、この寛文十年刊「書籍目録」成立時には、他の十四編も含めて、丹緑横本二十三編は全て刊行されていたと考えてよい。この時期に至って、これら二十三編全てが、始めて同時に出版されたのか。それとも、万治二年写本、及び寛文無刊記本目録に記載される作品に丹緑横本が存在するのかどうか。再び松本博士の論文に援用されて、伝本を調査すると、寛文無刊記本に加わった「子あつもり」が、版本としては御伽草子本一本しか存在しないことが判明する。即ち、この「子あつもり」は丹緑横本と推定される。そうであれば、この時期に他の作品の幾編かは、やはり丹緑横本として刊行されていたと考えられる。

結論的に言えば、御伽草子祖本の丹緑横本は、寛文十年に至るまで、徐々に出版されて来て、寛文十年に近い時期に二十三編中の九編以上が刊行されたと思われる。

寛文十年刊「書籍目録」に加わった作品を三弥井書店刊影印本「御伽草子」(注五)で調べてみると、「しまわたり」以外、量（丁数）が極めて少く、出版編数を急いで増やしたように考えられる。そして、最後に加えられている「一寸法師」には随所に文脈の乱れがあり、例えば、姫君が一寸法師の策略にはまって、家から追放される場面は、

（姫君）やみへとほくゆくふぜいにて、みやこを出て、あしにまかせてあゆみ給ふ。御心のうち、をしはからひてこそ候へ。あらいたはしや一寸ぼうしは、ひめぎみをさきにたてゝぞ出にけり。

とあって、波線を付した部分には、明らかに矛盾がある。少くとも「いたはしや」の次に句点を入れて、姫君についての描写にすべき個所である。

又、横山重氏が、「寛永頃の刊行」と言われた「ふんしやう」と、これらの作品群との挿絵を比較してみると、例えば、畳のへりの部分とか、天地のふち取りの部分とかに微妙な相違がうかがえる。

これらのことを考えると、二十三編が同時に刊行されたと考えるよりも、詞章や挿絵の板下が徐々に彫られ、それらが順次出版され、そして寛文十年近くになって、人気のせいもあったのだろうが、文体上の拙速も顧り見ず、今度は一度に編数を多く出版したのではないかと推測される。

以上、御伽草子祖本である丹緑横本の成立に関して、松本隆信博士の伝本研究の援用を受けながら、書籍目録所収の御伽草子作品の変化から検討して来たが、寛文六年頃の刊行と推定される寛文無刊記本からの寛文十年刊本への変化を考える時、丹緑横本の多くは、寛文期に入っての成立だと考えてよいと思われる。但し、諸本研究の権威であられる横山重氏や川瀬一馬氏が指摘されるように寛永期初印のものも数点はあったかも知れない。それら奈良絵本を模した丹緑横本が、明暦・万治と時を経て、少しずつ出版点数を増やし、そして寛文十年に至って二十三編の全てが出揃ったということになろう。

四　御伽草子本と寛文期

寛文十年には出揃った二十三編の御伽草子祖本の丹緑横本（以下御伽草子本と呼ぶ）は既に表(1)で見た如く、寛文期以降、延宝・貞享・元禄と亘って、他御伽草子の諸本とともに版を重ねて読まれ続けて行ったと思われる。御伽草子本の多くは、話源を中世にとり、内容も中世的なものが多いとは言え、詞章そのものは以上に見て来た

ように、近世に入り寛文期に近づいて書かれたものであった。そこに近世的要素が入り込む余地はないであろうか。何故御伽草子本が多く読まれたのか。そしてやがて享保期に至って「御伽草子」という呼称を得て、広く日本人の心のふるさとにまで至りうる素地を寛文期に作りえたのか。御伽草子本の成立と寛文期との関係を考えてみたい。

御伽草子の持つ祝儀的要素については従来既に指摘されて来た。それら祝儀的要素は本文内容によって伺えるが、殊に特徴的に表現されるのが、物語の末尾部の表現である。少しく引用が長くなるが、御伽草子本の性格を際立たせるため、二十三編全てについて、末尾表現を抜き出してみる。(注六)

〈文正草子〉

◎いかなる過去の行ひにやあらん。(文正一家は)みなみな繁昌して、栄花にほこり……栄耀にほこり給ふ。

〈鉢かづき〉

◎(宰相殿)末繁昌に住ませ給ふ。……子孫繁昌に住ませ給ひける。

〈小町草紙〉

△此物語を聞く人、まして読まん人は、すなはち観音の、三十三体をつくり、供養したるにも等しきなり。……南無大慈観音菩薩と回向あるべし。

〈御曹子島渡〉

○夫婦の中ほどせつなる事はよもあらじ。かくて兵法故日本国を思ひのまゝにしたがへて、源氏の御代とならせ給ひけり。

〈唐糸さうし〉

◎(されば万寿)母を助け、数の宝を給はりて、子孫ともに繁昌するなり。万寿姫の親孝行故なりと、うけ給はり候。かゝるめでたき物語かなと、感ぜぬ人はなかりけり。

〈木幡狐〉

◎若君はとり〳〵繁昌させ給ひ、末繁昌とぞ聞え給ふ。……かゝる畜類だにも後生菩提の道を願ふならひなり。いはんや人間としてなどか此道を歎かざらんや。かやうにやさしき事なれば、書き伝へ申すなり〳〵。

〈七草草紙〉

○今の世までも、親孝行の人は、天道の恵みにあづかるべし。必ず人をあはれめば、その報早くして、わが身のためとなるとかや。

〈猿源氏草紙〉

◎阿漕が浦へ、うちつれて下りつゝ富み栄へて、子孫繁昌なりしも、互の志深き故、または歌の道浅からざり

し故なれば、かへす〳〵人ごとに学び給ふべきは歌の道なるべし。

〈物くさ太郎〉

○毎日一度此さうしを読みて、人に聞かせん人は、財宝に飽き満ちて、幸い心にまかすべしとの御誓なり。めでたき事なか〳〵申すもおろかなり。

〈さゞれいし〉

○（さゞれ石の宮）其身もかへずして、成仏し給ふこと希代不思議のためしとかや。上代も末代も、かゝるめでたきためしなし。

〈蛤の草紙〉

◎（しじら親孝行故に七千年の齢で）此後はいよ〳〵富貴繁昌にて、仏神三宝の加護あるべし。……此草紙見給ふて親孝行に候はゞ、……（まづ現世にては）末繁昌成るべし、後の世にては必ず仏果を得べきこと疑なし。

〈小敦盛〉

△（北の方）敦盛の菩提を弔ひ、……行ひすましてつゐに往生をとげ給ふ。いよ〳〵是を見る人々、よく〳〵後世肝要なるべきなり。

〈二十四孝〉（唐夫人の話）

◎さればやがて報ひて、末繁昌する事極まりもなくありたるとなり。

〈梵天国〉

○（羅刹国から帰った中納言と姫君とは、丹後但馬の両国を賜り）姫君は成相の観音とあらはれ給ふ。中納言は、久世戸の文殊となり給ひて、衆生を済度し給ふ也。

〈のせ猿さうし〉

◎その後御子あまたいできさせ給ひ、末繁昌に栄へさせ給ふ。昔も今もかゝる御幸ひあらじと、めでたき事限りなし。

〈猫のさうし〉

○かやうの御政道は、昔が今に至るまで、有りがたき御事なり。君もゆたかに民栄へ、久しくめでたきことばかりにて、心ゆるがせなるのみなり。

〈浜出草紙〉

○天人は天降り、竜神は浮き上り、船行動にめぐるらん。見聞覚知のともがら、浮かれてこゝに立ち給ふ。御前の人〳〵御所領給はり、所知入りとこそきこえけれ。

〈和泉式部〉

△こは何事ぞ、親子を知らで逢ふ事も、かゝるうき世にすむ故なり。是を菩提の種として（書写山へ上り得心し……）

〈一寸法師〉

◎住吉の御誓に、末繁昌に栄へ給ふ。世のめでたき例、これに過ぎたることよもあらじとぞ申し侍りける。

〈さいき〉

○是も清水の観音の御方便にて、三人共に救ひ取らせ給ひて、いづれも行ひすまして、往生の素懐を遂げ、弥陀、観音、勢至とあらはれ、三尊是なりといへり。まことにありがたく、たつとかりけるめぐみなり。

〈浦嶋太郎〉

○其後浦嶋太郎は、丹後国に浦嶋の明神と顕れ、衆生済度し給へり。亀も同じ所に神とあらはれ夫婦の明神となり給ふ。めでたかりけるためしなり。

〈横笛草紙〉

△横笛がためにとて、高野山に上りつゝ、案じすましてゐたりけり。

〈酒呑童子〉

○それよりも国土安全長久に治まる御代とぞなりにける。かの頼光の御手柄、ためし少き弓取とて、上一人より下万民に至るまで、感ぜぬ者はなかりける。

以上、二十三編全てについて末尾部の特徴的な個所を抜き出したが、主人公がやがて出世し、「（末）繁昌し」「栄華を極め」「めでたし〳〵」と終わる話が殆どであり、その祝儀的要素が首肯できよう。これらの中◎印を付した九編の作品は、後に御伽草子本のキイワードとして認めようとする「（末）繁昌」を文中に持つ作品であり、○印を付した十編の作品は「（末）繁昌」という表現はないけれども、「めでたし」「栄へ」「恵み」等の祝儀的表現を持つ作品であって、両者を合わせ、実に十九編が祝儀物だということになろう。その他の四編は、△印を付したが、仏教の、尊くありがたい功徳を説いた作品であった。

そして、これらの作品を、読んだり聞いたりする者は「財宝に飽き満ちて、幸い心にまかすべし」と言うのであった。その後享保期に至って渋川清右衛門が、これら二十三編を叢書として箱入りにし、嫁入本として売り出した最も大きな理由は、この祝儀性にあったのであろう。これらの箱入り叢書は、一家の貴重な調度品となり、親に孝、夫婦仲良く、信仰心の涵養等封建道徳思想の強化[注七]書の役割を果たしたことは別に拙稿にて見た如くである。

これら御伽草子本を含め、広義の御伽草子群は三百編以上あると言われているけれども祝儀性という点について他の作品は如何であろうか。御伽草子本と他作品との比較に際して、幸い、新釈日本文学叢書『御伽草子集』[注八]に「猫の草子」を除いた御伽草子本群二十二編と、それ

以外の作品二十四編のほぼ同量の作品群が収められる。それらを調査すると御伽草子群は二十二編中十八編に祝儀性があるのに比して、他作品群は、二十四編中六編に祝儀性が認められるにすぎなく、渋川版御伽草子本を蔽う祝儀的特徴が確認できる。

御伽草子本に何故祝儀物が多いのか。その理由を、寛文期との関わりから考えてみたいと思う。

先に見た「書籍目録」の刊行によっても判るように、寛文期に入って極めて多量の出版物が刊行されるようになっていた。御伽草子本はその中のほんの一部であり、仏書・儒書・軍書・医書・歌書・俳諧書・女書・謡本・茶湯書・名所尽等、多種類にわたっていた。そして御伽草子周辺には、仮名草子・舞の本等があり、更に、それまで語り芸能であった、古浄瑠璃や説経の正本（テキスト）の奈良絵本化や丹緑本への刊本化も行われていた。(注九) 既に徳田和夫氏の御指摘にもあるように、御伽草子祖本の丹緑横本と同じ板式で、古浄瑠璃「たかたち」がある。又、例えば「子あつもり」や「梵天国」等は、御伽草子にも古浄瑠璃に説経にも同じ話が残される。同じ素材が時に御伽草子で読まれ、時に操り芝居で観劇されたのであった。

御伽草子と他ジャンル、殊に古浄瑠璃や説経とは密接な関係にあった。これら古浄瑠璃や説経は祝儀性が強い芸能であった。

既に、別に拙稿において、横山重氏編『説経正本集』（全三巻）及び、同氏を主編者とした『古浄瑠璃正本集』（全十巻）について、そこに収められる正本（説経、四十六編、古浄瑠璃、巻三までの七十四編について）の末尾部を調査し、祝儀表現の多さを報告したことがある。(注十) 「（末）繁昌（に栄ゆ）」「（再び）栄華（に栄ゆ）」「富貴の家（と栄ゆ）」「千秋ばんぜい（と栄ゆ）」の四語句を選んで調査したところ、説経では四十六編中二十二編に、古浄瑠璃では七十四編中約四十編に、これらの表現が見出された。御伽草子本二十三編も加えて、それらの語句の内訳は次表(4)の如くである。

表(4)

	（末）繁昌	栄　華	富貴の家	千秋万ぜい
説　　経（四六編中）	一一編	三　編	八　編	一一編
古浄瑠璃（七四編中）	一二編	一四編	七　編	六　編
御伽草子（二三編中）	九　編	一　編	〇　編	〇　編

比率的に見れば、説経には「千秋万ぜい」が、古浄瑠璃には「栄華（に栄ゆ）」が、そして御伽草子本には「（末）繁昌」が多く、それらの語句を、それぞれのジャ

ンルのキイワードと言ってよいだろう。今、御伽草子本のキイワード「（末）繁昌」について、『古浄瑠璃正本集』第一～第五所収の一二一編の正本を調査し、刊行年順に出版数と「（末）繁昌」の記載正本数を示したものが次表（表(5)）である。

表(5)

年数	年号	分明出版数	『（末）繁昌』記載数
1624 (20)	寛永	10	0
1644 (4)	正保	9	0
1648 (4)	慶安	7	0
1652 (3)	承応	2	1
1655 (3)	明暦	1	0
1658 (3)	万治	11	4
1661 (12)	寛文	39	10
1672 (8)	延宝	5	0
1681 (3)	天和	0	0
1684 (4)	貞享	1	0
1688 (16)	元禄	3	0
1704 (7)	宝永	0	0
1711 (5)	正徳	0	0
1716 (20)	享保	1	0
刊年不明		32	8

この表から明らかなように、万治・寛文年間（一六五八～七二）に至って、殊に多量の正本が出版されている。しかも、それらの多くが、「（末）繁昌」を持っていることが判明する。即ち、「（末）繁昌」という、御伽草子本のキイワードは、万治・寛文期に刊行された祝儀物の古浄瑠璃正本中にも多く見られる語句であり、御伽草子本の寛文期に近づいての成立の傍証となりえよう。

以上に見たように、御伽草子本や古浄瑠璃正本の祝儀的要素を持ったものの多くが寛文期に出版された。別に、説経についても、そのキイワードが、寛文期を境にして、「あらいたはしや」から「千秋万ぜい」へと移ったことを報告したけれども、寛文期とは、芸能や文芸の世界に、あるエポックを作っているように思われる。

寛文期とはどんな時期であったのか。徳川幕府始まり約半世紀が過ぎていた。武士階級の全国的な結集を果たしえて成立したのが徳川幕藩制国家であり、それが完成するには職業と身分とを一体化させる士・農・工・商を基本とする身分制度が確立し、社会秩序にまで至る必要があった。中世においては、まだ武士を中心にして、いわば同族と同義においての「家」が存在した。しかし、兵農分離以後の近世社会においては職能集団として身分化されたそれぞれの階級にまで至っての家＝家族・世帯

が問題にされるようになる。幕藩体制は、「家」という制度を通じて、階級関係、身分制秩序、社会的諸分業が固定的に再生産されるという仕組において完成される。寛文期は、徳川幕藩体制が完成した時期と言われるが、殊に、富を貯えて経済的に進出して来た町人（商人）階級の「家」意識が高揚し、家業に出精し、「家」を繁昌させようとした時期であったと思われる。

慶安四年（一六五一）、四十八歳で病死した家光のあとを受けて家綱が四代将軍になったのは十一歳の時であった。以来、大老井伊直孝、酒井忠勝、老中松平信綱、阿部忠秋、そして家光の遺言によって補佐役となった保科正之等の集団指導体制がとられた。家光なき後の将軍交代期において、由比正雪の慶安事件を中心にした牢人問題があったとは言え、綱吉の元禄時代に至る家綱三十年間の治世は比較的平隠裡に諸制度の整備がなされ、幕藩体制が固った時代であった。明暦三年（一六五八）、江戸で大火が起こり、市中の大半が灰燼に帰した。しかし老中松平信綱を中心に大規模な復興計画が実施され、面目を一新した大江戸八百八町ができあがり、江戸は一大発展を遂げることとなる。人口は急速に増加し、経済面にも大きな変化が生じる。この時期新たに上方の問屋商人が江戸に進出して来る。例えば、寛文二年（一六六二）京都白木屋が江戸へ進出し、小間物屋を開いて販路を拡張する。又越後屋を築いた三井高利もこの期に江戸に出てやがて呉服屋を構えて発展する。このような江戸進出商人に象徴されるように資本主義経済の仕組が徐々に強まる中、富を蓄積する商人の増加が目立ってくるのが、寛文期あたりだととらえてよかろう。寛文三年八月「武家諸法度」が公布され、その中で、殊に武士の奢侈が禁じられる。九月には大名に対する倹約令も出される。武士の暮しが派手になり、消費生活が著しくなったためであるが、武士への奢侈禁止は、むしろ町人生活そのものが贅沢を極めるようになっていたことの証左であろう。

本屋商人が本を出版する。呉服屋や小間物屋商人が、儲けたお金でその本を買い、自分の家の子女に土産に持って帰る。子女は、操り芝居に出かけ、その芝居の演目を又本で読んで楽しむ。その内容は家の繁栄を扱う祝儀物が多かったことだろう。ヒエラルキーの頂点には立ち得ない商人にとって、経済上での優位さこそが彼等の願望であった。その願望を実現するためには、家業に精を出し、有能な跡取りを作り、「家」を繁栄させることが必要であった。殊に、寛文期という、武士との階級闘争の出発点ともいうべき時期において、彼等にとっての芸能や文芸は、「家」の「繁昌」へと収斂して行くもので

なくてはならなかった。その意味で、それら寛文期の芸能や文芸は、以後二百五十年の命脈を保つ徳川幕藩体制を支える「家」制度の確立に手を貸すことになる。我々は、そこに封建体制を内側から支えようとする町人（民衆）の本音を知ることができる。

御伽草子本の話源が中世的であることを否定はしない。「文正草子」「鉢かづき」から始めて「酒呑童子」に至るまで、やがて享保期に「御伽草子」の呼称を得るにふさわしい昔話性、童話性、民話性を含んでいることも否定はしない。しかし、それらの内容が、御伽草子本の多くにおいて、既に指摘して来た末尾表現にて見た如く祝儀的主題へと傾斜する表現を附会することにより近世的な装いを加えていることは注意してよいであろう。

「末繁昌」に栄え「栄華」に栄え、「千秋ばんぜい」と祝いうる「富貴の家」を願う祝儀物としての御伽草子や古浄瑠璃や説経は、まさにかかる寛文期と密接に結びついた文芸であり、芸能であった。

五　おわりに

渋川版御伽草子本の祖本丹緑横本の成立時期について、主に寛文十年刊『増補書籍目録』に記載された御伽草子本群に注目し、松本隆信博士の伝本研究に援用されて私見を述べた。二十三編の丹緑横本は、寛文期以前の近い時期から徐々に刊行され始め、寛文期に入って、それらの多くが刊行された。そして、寛文十年には二十三編全てが出揃っていた。これら二十三編の御伽草子は多くが祝儀物で、末尾部に「（末）繁昌」を中心にした祝儀表現を持つ。それら祝儀表現は、万治・寛文期に最も多く出版された古浄瑠璃正本の詞章にも共通して多く存在するものであった。

寛文期という幕藩体制の確立期において、各身分に応じての「家」が重視された。商人も「家」の繁昌を切望し、そして繁昌した「家」に蓄積された富の力によって、身分的上位の武士に対抗しようとした。徳川封建体制において、階級的弱者の商人が、体制を破ることなく、むしろ体制を逆手にとって、実質的な勝者の位置に立とうと願う。そこに民衆のしたたかさが感じられるのであるが、そのしたたかさによって御伽草子本の人気は支えられて来たのであった。

お家繁昌のための経典の如き役割を担わされた御伽草子本に、「個」の自由を読みとり、そして、人間性の心の機微を読みとることは望みえない。御伽草子の話の多くは荒唐無稽で、しかも荒筋に近く、人間の心の機微や

悩みや葛藤は切り捨てられる。「お家繁昌」「めでたしめでたし」と一家揃っての繁栄を鼓舞する点において、御伽草子本とは「個」を切り捨てた「家」の物語であった。けれども、封建体制下、圧殺された「個」＝人間の呻きはあった。寛文十年、御伽草子本が出揃った時、西鶴は二十八歳であり、近松は十八歳であったが、束の間のルネッサンスと言うべき元禄文化の中で、彼らは「個」の自由と、抑圧された人間の心の悲しみとを主張した。とは言え、状況は、圧倒的に「家」が優位であった。民衆は結局は「家」の中に幸せを見出そうとする。「家」に反撥し、封建体制を否定して、人間的な真実を生きるよりも、体制を肯定し、体制の中で物質的な幸せを求めて生きる道を選ぶ。元禄時代が過ぎ去り、幕藩体制の矛盾が噴出した享保期、八代将軍吉宗による改革が断行される。幕藩体制の再編成と、封建体制の一層の強化が行われる。「家」は「個」を蹴散らしてますます圧倒的な勢力を持とうとする。その享保期、渋川清右衛門が二十三編を覆刻し、今度は「御伽草子（御伽文庫）」という愛称をつけて嫁入本として売り出す。その時、御伽草子本は吉宗政治に迎合しながら、封建道徳の教化書の役目を担って行く。

御伽草子本の成立に関して、その祖本丹緑横本の成立期としての寛文期に焦点をあてて論じて来た本稿は、ここにおいて、既に別稿（注十一）にて論じた、享保期へと焦点を移すこととなる。

注

一　松本隆信博士は「伝本から見た御伽草子二十三編について」（『長澤先生古稀記念　図書学論集』三省堂刊）において、以下に挙げた七編の中、「酒天童子」を入れず、「物くさ太郎」を入れられる。しかし、博士編になる「室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』三省堂刊）や『室町時代物語大成』の「物くさ太郎」諸本解題にも、丹緑横本と思われる版本は見あたらない。

「酒天童子」については、『古浄瑠璃正本集第一』の「口絵解題」において、横山重氏が紹介されていて、「横本。丹緑本。今は巻子本に仕立てゝある。柳宗悦氏蔵。此本は、お伽草子本の原本と認められる本で、丹緑の筆彩色がしてある。寛永頃の刊行であろう。」とされるもの。

二　注一参照。

三　「江戸時代　書林出版書籍目録解題一」において阿部隆一氏が「以上の所から見ると、本書は寛文五年から六年

の間に刊行されたと考えるべきであろう。」と言われるのに従う。

四　注一でも触れたが、「室町時代物語類現存本簡明目録」（昭和三十七年に公刊されたものを増補改訂されて、三省堂刊『御伽草子の世界』に収められている。）は、御伽草子研究に極めて貴重なものである。

五　市古貞次博士蔵『御伽草子』の影印。

六　岩波書店刊日本古典文学大系『御伽草子』の本文に拠る。

七　「享保期における渋川版『御伽草子』の位置」（「日本文学」昭和五七年七月号所収）論文にて述べた。

八　内海弘蔵編（昭和五年内外書籍株式会社刊）。渋川版二十三編の中「猫の草子」が収められていないが、恐らく、「慶長ごろ」という本文表現から近世作だとして収められなかったのだろう。

九　「お伽草子ー寛文・延宝期頃の刊本、渋川版ー」（「解釈と鑑賞」昭五五年九月号所収）論文。

十　拙稿「あらいたはしや千秋万ぜいのエレジー」（「豊田高専研究紀要16」所収）

十一　注七に同じ。

《豊田工業高等専門学校》